
トイレからもれる声

大森ろら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トイレからもれる声

【Nコード】

N58860

【作者名】

大森ろら

【あらすじ】

父を交通事故で亡くしたわたしと、お弁当屋で働く母親。母親は職場でいじめにあい、わたしのクラスでは同級生の女の子がクラス中から無視されている。

ちょっとした流れの変化、そして勇気が現状を変えてくれることを描いた物語。

【注意】 この作品は私の個人サイトでも公開しています。

h
t
t
p
:
/
r
o
r
a
.
i
k
i
d
a
n
e
.
c
o
m
/

ん・・・・・・・・・・はああ・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・はああ・・・・・・・・・・

さっきからずっと、トイレから母親の声が漏れ聞こえている。

それは・・・・・・・・・・母が（大）を力んで出している吐息。

トイレのドアはちゃんと閉まっている。居間の戸も閉まっている。でもなにせ安普請。なんでも筒抜け。声、まる聞こえ。

わたしは宿題の古文を居間のテーブルでいていたが、その声が気になってなかなか昔の雅な文章が頭にはいつてこない。

トイレで水が流れる音がして、母が出てきた。洗面所にいく。手を洗う音。（大）のあとはいつも石鹸でちゃんと手を洗うのだ。

居間にはいつてきた母にわたしは、

「出た？」

とたずねる。

「出た」と母。

わたしと母はふたり暮らし。父は二年前、わたしが高校一年生のときに交通事故で亡くなった。余所見運転の車にはねられたのだ。父はちゃんと青信号の横断歩道を渡っていただけなのに。

「ん・・・・・・・・・・はああ・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・はああ・・・・・・・・・・」

わたしは母のマネをしてみせる。いつものことだ。母が笑う。

「ちょっとやめてよ」

「だってすぐよく聞こえてくるんだもん」

「しょうがないでしょ。出ちゃうんだもん、声」

「力んでるでしょ」

「うん」

「痔になるよ」

「・・・・・・・・」

朝食をふたりで食べる。母は弁当屋の仕事へ。わたしは学校へ。母は弁当屋の先輩女性からいじめを受けている。いじめ、という大袈裟なのかもしれないが、いろいろうるさいことを言われて、母は悩まされている。することなすこと、いちいちきつい言葉で注意されるので参ってしまいうらしい。ヒステリックな四十代前半の女性。母よりは年下だ。

仕事から帰ってくると、夕飯を食べながら母は時々・・・・・・・・というか、頻繁にそのヒステリー女の話をする。今日はなに言われた、カチンときたけど、「はいはい」って言ってきいていた。ほんと、いやになる。やめたい。そう言って、太田漢方胃腸薬を飲む。「辞めたら？ 他の仕事、さがしたら？」とわたしは母を心配して言う。

すると、母は口を曲げる。

「そうそう新しい仕事なんかみつからないわよこの年で。それに、千華に話を聞いてもらうだけですっきりするからいいの」

でもわたしは母のことが心配だ。いやな思いを毎日しているとちょっと、胸がふさぐ。

どこでも一緒なのだ。

学校でもわたしの胸をふさぐことがある。

クラスで小林薫という子がみんなから無視されているのだ。完全に孤立している。いつもひとりでいる。だれも彼女に話しかけない。きっかけはクラスの男子と彼女がなにか些細なことで言い争いをしたことにあった。その男子はけっこうクラスでも人気のある子で、そのせいか、その日を境にだれも小林さんに近づくなくなった。まるで彼女などそこにいないかのようにふるまう。彼女は空気のような存在になった。あるいは、透明人間。

夏服にもなれて、季節は夏。タチアオイの花も下から枯れてきた。でもまだ咲いている。わたしはあの花がすきだ。一本で凛とまっすぐ天にむかって伸び、大きな花をいくつも咲かせる。この花が学校

を囲むようにして咲いている。この学校で一番好きなのは、このタチアオイだと言ってもいい。だから、この季節が一年で一番好きだったりする。

今日も小林さんは休み時間にひとりで本を読んでいた。なんの本を読んでいるのだろうか？ 気になる。彼女のことだが、いつもなぜか、気になっている。彼女に声をかけたいとおもう。でも勇気がでない。声をかけたらどうなるのだろうか？ わたしは弱虫だ。

ん・・・・・・はああ・・・・・・んん・・・・・・はあああ・・・・・・

「痔になるよ」

「ならない」

それより、と母がトマトを箸でつまみながら言う。

「いつも話してるひとだけだね、なんだかおとなしくなっちゃったのよ」

「え・・・・・・そうなんだ」

「うん。すこし前に、新しいひとが入ってきてね、そのひとササキさんという五十代のひとなんだけど、すぐ押しが強くて、仕事もてきぱきやって手際がいいの。で、教えるほうのヒステリー女のほうがもたついちゃったりして、ササキさんにけっこうきつい言葉で注意されてるのよ。で、あのひとわたしに泣きついてきてさ。ああいう普段強気な人って上から押し込められると弱いもんね。でも今更って感じよねえ」

「うんうん」

「ふたりはさ、すっかり対立関係みたいになっちゃって、でもササキさんはほんと頭の回転が早くて仕事ができるのね。それに比べてヒステリー女はすぐテンパルわけよ。でも、ちゃんと仕事してるひとに文句も言えないじゃない？ 笑っちゃうのがさ、わたしのとこきて、こっそり『藤田さん、辞めないでね？ 頼りにしてるの』な

んて言うの。ばっかみたい。あんなにわたしに強くあたってきたのにさ」

「ほんとだね」

「でもおとなしくなってくれてほっとしたわ。ササキさんは言い方はきついけど、正当なことしか言わないし、さっぱりした気性でわたしはけっこう好きなタイプだね。あのひとが来てくれて正直助かったわよ。わたし、内心、どっかほかの仕事さがそうかって迷ってたから……」

わたしはほっとした。とにかく、母の目の上のたんこぶはおとなしくなったらいい。

学校に登校すると、タチアオイが目にはいる。強い日差しに、下のほうから花が枯れてきている。でも上のほうにはまだ蕾がある。まだまだだ、とわたしはおもう。ピンク色の美しい花に近づいて、しばしみとれる。すると、ふと隣に誰かの気配がした。みると、小林さんだった。彼女はわたしには目もくれず、タチアオイを見つめている。視線は感じているはずなのに、わたしを振り返らない。彼女はしばらくそこにいたあと、黙って校舎にむかって歩いていった。わたしは呆氣にとられた。今のはなんだったのだろう？

でも彼女もこの花を愛でるきもちがまだあるのだ。そういう心の余裕があるのだ。そう思うと、わたしはますます、彼女のことを気になってきた。

教室にはいる。セミがわめいているように相変わらず騒がしい教室。でも授業がはじまるとさすがにしんとなる。わたしは考えている。小林さんのこと。彼女とタチアオイが重なりあう。

キンコンカンコン

ざわめきが教室に戻る。次は音楽の授業だ。みんな教科書や筆記用具をもって音楽室に移動しはじめる。

小林さんの姿をさがす。彼女は椅子に座ったままじっとしている。

いつも彼女はみんなが移動し終わったあと、そっと教室に向かう。
わたしは教科書と筆記用具を胸に抱えると、クラスメイトの間を
ぬって、小林さんのところまでいった。彼女がゆっくりとわたしを
見上げる。そのまなざしは泉のようにしずかで透明感がある。

「次、音楽だよ。移動しよ」

わたしはそう彼女に言った。

彼女はわずかに口をひらいた。

教室のざわめきに変化は起こらない。だれもわたしたちを気にか
けていない。

小林さんの表情は次第にやわらかさを取り戻していった。まるで
蕾がいまにも花ひらこうとしているかのように。

わたしは心のなかでおもった。

（なんだ。こんなに簡単なことだったんだ）

わたしはにっこり彼女に微笑みかけた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5886o/>

トイレからもれる声

2011年5月11日19時55分発行